

オクラの着花に対する幼苗期の温度と日長の影響

渡 司 照 久

(宮崎県総合農業試験場)

播種期と品種の違いによるオクラの着花の変化について調査し、さらに幼苗期における温度と日長処理の違いが着花の変化に及ぼす影響について検討したので報告する。

1. 試験方法

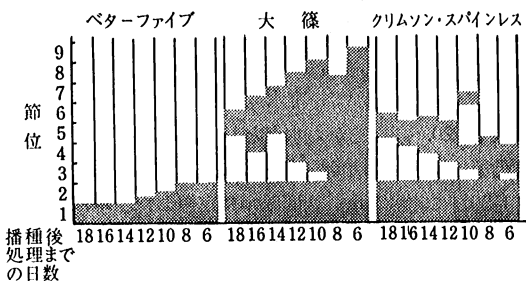
(試験1) 市販の代表的3品種を用いて2月、4月、6月、8月の4回ハウス内のベッドに播種して着花の変化を調査した。(試験2) 試験1で用いた3品種を3月8日から3月20日までの間、2日おきに12cmポリ鉢に芽出し播きした苗令のちがうオクラ苗に対し処理を行なった。温度処理は3月26日から7日間小型人工気象箱で20℃および30℃の恒温条件下におき、その後ハウス内に戻した。日長処理は、ハウス内で3月30日から10日間16時間の長日条件下においた。

2. 結果及び考察

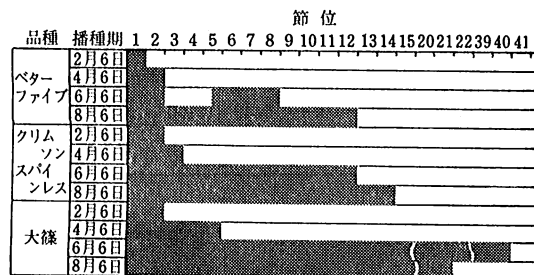
(試験1) 自然条件下のオクラの着花は品種、播種期によって大きな違いがあり、ベターファイブおよびクリムソン・スパインレスでは、いずれの播種期とも15節以上の不着花節はみられなかったが、大篠は6月、8月播きの場合に高節位まで不着花節が発現した。(試験2) 20℃で処理した場合は、自然条件下の2月播きと同様で、不着花節の発現は2節までに限られた。30℃で処理した場合は、ベターファイブは2節まで、クリムソン・スパインレスでは2節までと、処理の影響と思われる節位に

限られた。大篠は2節までと、処理の影響と思われる節位の他に、早い時期の処理ほど高節位まで影響を受けた。16時間長日処理の不着花節は、ベターファイブは2節まで、クリムソン・スパインレスは2節までと処理の影響と思われる節位に限られた。大篠は2節までと、処理による影響と思われる節位の他、それ以下の節位にも不着花節が発現した。

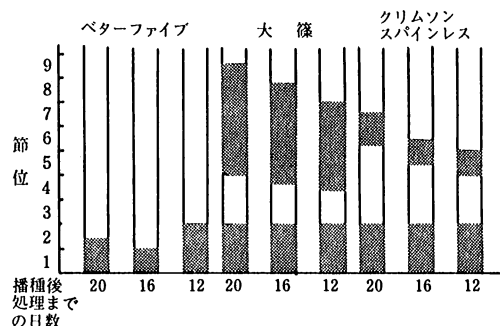
以上の結果、オクラの着花は品種および播種期によって大きな差があり、これは、温度、日長時間によって変化し、その反応は品種によって著しい差があることを明らかにした。



第2図 30℃処理した場合の不着花節の発現



第1図 品種及び播種期と不着花節の発現



第3図 16時間長日処理した場合の不着花節の発現